



パスト・ガバナー 吉川 謹司

(東大阪東RC)

新しい年を迎え、ロータリアンの皆様のご健勝とご活躍をお祈りいたします。

ロータリーを語るときしばしば引用されるのが、1923年のセントルイス大会で34番目に採択された決議23-34です。ロータリーの本質と奉仕活動のあり方を理解するための指針として、第一に「ロータリーは人生哲学である」ことを宣言し、その哲学は「利己と利他の調和を目的とし、最も多く奉仕する者が最も多く報いられる」旨の説明がなされています。私は地区WCS委員会の副委員長をしていた折、委員会活動で1996年4月に故古田敬三PGとともにインドを訪れましたが、その際、マザー・テレサにお会いする光栄を得ました。「愛の奉仕者」と呼ばれた彼女は、1948年にカルカッタのスラム街で単身、貧しい人々を支援する活動をはじめ、その宗派を超えた奉仕活動によって多くの人々を救い、ノーベル平和賞を受賞されました。彼女は1997年9月に87歳で亡くなりましたが、彼女が1950年に創立した「神の愛の宣教者会」には、1997年時点で約4,000人の修道女が集ま

り、世界123ヵ国610箇所で行うまでに成長していました。マザー・テレサは行動の人でしたが、同時に多くの含蓄ある言葉で人々の胸を打っています。その中に「親切で慎み深くありなさい。あなたに出会った人が誰でも、前よりも、もっと気持ちよく、明るくなって帰れるようになさい」という言葉があります。これは、奉仕の中身も大切であるが、人との出会いによって、その心に希望をもたらす努力をなさい、との教です。

私たちロータリアンは、毎年度RIのテーマのもと様々な奉仕活動に取り組んでいますが、ときにそれらの活動に対して理屈だけの理解にとどまり、利己と利他の葛藤に悩むことがあります。そうしたことを感じれば感じるほど、毎週の例会を初めとした各種の会合に参加されることをお勧めします。そこには必ずや多彩な出会いがあるはずです。知己が増え、学びあい、友情を深めることで、奉仕活動に参加することが楽しくなります。その瞬間こそ、理屈を越えて希望を共有できる貴重な体験なのです。